

## 無機と有機の間

作品、鑑賞者、作家、制作者、美術館、植物、いきもの

主人公はだれなのか

毎日、カラスに出会う。そのカラスは飛んでいたり、何かをついばんでいたり、雨に濡れて道を歩いていた。

今年の8月に夜行バスで岐阜へ来た。造園業者による美術館敷地内の道路脇の木の枝の剪定を見るために。剪定といっても高所作業で大きなクレーンに二人が乗り、高いところの枝をどんどん切り落としていく。（その時の枝が作品に使われています）

2日間の予定が天気が悪く、残り半分は次の週に行われた。自分が立ち会ったのは1日だけである。

美術館と共に成長した木は35年の間に大きくなり、建物を囲む緑の壁となった。そこは生き物の巣にもなっている。蜂や鳥や昆虫やヘビ、小さな生物が潜んでいる。

植生は豊かでヤマモモ、ソヨゴ、スダジイ、ヤブツバキ、ナナメノキ、クスノキ、ケヤキをはじめ、いたるところに生えている。野外彫刻も多く点在し、植物との関係が曖昧になっている。

雨が降ったり止んだり。作品が現れたり、消えたり。

公開制作中に何度も大雨が降った。その度に新鮮な葉っぱが落ち、みんなで描いたかたちは地面にすべて吸い込まれた。集めた葉はパステルになり、描いた絵は、コンクリートから姿を消した。

鳥が休館日に訪れる

11月6日の昼前に一羽のムシクイが制作中の作品の枝にとまっていた。

岐阜県美術館に対する特別な気持ち、ルドンについて

2002年にオーディロン・ルドンの絶対の探求という展覧会を見た。当時中学2年生だった自分は音楽の先生（奥村先生）に日曜日、こっそりと車で連れて行ってもらった。帰りの車の中で、心の中にローソクの明かりがひとつぼつりと灯ったのを感じた。それ以来、その火を消さないように生きてきた。作家になろうと思った日である。（植物パステルはルドンのパステル画や木炭画からヒントを得て作りました）

コーヒー豆の焙煎と鵜飼のこと

滞在制作中はコーヒー豆を毎日焙煎した。多くの人に焙煎をしてもらい、その豆をカラスの形をした袋（コーヒーパペット）の中に入れてもらった。膨らんでお腹がいっぱいになった様子。また、飲む時はカラスから豆を吐き出させ、コーヒーを飲む。カラスは少し軽くなって少し痩せてしまう。

鵜飼について考えることがある。鳥から人が食べ物をもらうこの文化はどうして生まれたのだろうか？鵜匠は鵜をパートナーとして大事に育てているように感じる。無理やり魚を取らせるというよりは、一緒に協力しているように感じる。

約1ヶ月の滞在制作の中で岐阜の土地や美術館のこと、同じ空間を人だけでなく植物や生き物がそれぞれ違う意を持ちながら共存していることが見えてきた。だれのものでもないこの空間にそれぞれが心地よさを感じ取ってくれることがこの作品の姿なのかもしれない。

田中彰